

月刊

言語

2009
5
Vol.38・No.5

2009年5月1日発行(毎月1日発行)第38巻第5号通巻454号 昭和47年8月12日第3種郵便物認可

特集 ことばへのアプローチ143冊

言語研究のためのブックガイド

- 言語学入門 佐久間淳一
- 日本語学 ナロック ハイコ
- 音声学・音韻論 米山聖子
- 言語哲学 糸川麻里生
- 社会言語学 松田謙次郎
- 語用論 滝浦真人
- 歴史言語学 樋口康一
- 言語類型論 藤井文男
- 生成文法 岸本秀樹
- 認知言語学 岡本順治
- 言語の獲得と発達 梶川祥世
- 記憶とことば 清水寛之
- 言語心理学 茂呂雄二
- 自然言語処理 浅川伸一

◆特別記事
コピュラ文、存在文、所有文
——名詞句解釈の観点から——
西山佑司

◆巻頭エッセイ
大河原眞美 / 前田英樹



リグヴェエーダ

後藤敏文

(1910 - 2006)



1 「リグヴェエーダ」

インドの地に入ったアーリヤの人々が最初に編集したのが、讃歌集『リグヴェエーダ』である。紀元前一二〇〇年頃のことであろう。複数の祭官家系が護持していた一〇一七讃歌、一万以上の詩節が一定の編集方針の下に収録され、今日に伝わる。詩人たちが理法の認識に基づいて「見た」詩句には、真実・事実（サツテヤ）にならなかったことばもつ実現力が籠もっている。そのようなことばが「ブラフマン」の原義である。宇宙秩序、真理、理法に当たる概念は「はまっている、合っている」を意味する過去分詞リタ（ルタ）で表された。「天理」と訳すことにする。過去・現

在などの時の表示をもたない動詞形が多用されるリグヴェエーダは、ホメーロスの叙事詩のような出来事を「報告」する物語ではなく、知っているはずの宇宙秩序、真理や共通体験に「言及」する、歴史を超えた文学という性格をもつ。

讃歌の原型はインド・イラン共通時代に遡る。山岳地帯やステップにおける遊牧・掠奪中心の生活が反映される所である。現存する讃歌はインダス上流域で最終的な形を得たもので、当時の詩人が往時の詩を擬したものを中心に、独自に作った讃歌や詩行・詩句を交えている。

「ヴェエーダ」はバラモン教聖典の総称で、「（ものを実現

する）知識」の意味に由来しよう。ドイツ語 *wisser* 「知っている」
、「ギリシャ語のアイデア、ラテン語から現代諸語に移入された *video* などの基にある動詞「見出す、知る」から作られた。讃歌の各詩節をリチとよび（リグは有声音が後続するときの形）、神々への讃歌を集めた聖典の意味で「リグヴェエーダ」と名付けられていた。

2 祭官たち

『リグヴェエーダ』を伝承したのは祭官職「ホートリ（ホータル）」の家系である。ホートリは「（祭火にバターなどを）注ぎ献する人」を意味し、イランのザオタル「祭官、司祭」に当たる。ゾロアスター（ザラスシュトラ）はザオタルであった。祭式には、穀物や犠牲獣、ソーマが用いられる。ソーマは「搾り出す」を意味する動詞の派生語で、興奮作用をもつ植物（おそらく麻黄）およびその搾り汁を意味し、ゾロアスター教徒のハオマに対応する。詩人はカヴィ「見者」、リシ「興奮に）荒ぶれる者」、ヴィツプラ「うち震える者」などとよばれ、精神の昂揚を得るためにソーマが用いられたことを示唆する。ソーマが戦闘や掠奪行に興奮剤として使用されたことは、インドラ讃歌などが

知られる。インド・イラン共通時代にソーマを知るようになる以前は、蜜酒がその役目を果たしていた。ソーマ祭では、讃歌に節をつけてサーマン（歌詠）が歌われる。

祭官たちは、天理（リタ）を認識し、それに基づくことばの力によって自然界・人間界を操作する役割を負っていた。神々に対しては配慮にすぎない願望形ではなく、意志や命令を表す動詞形を用いるのが原則である。頭にある「思考」によって組み立てられ、心臓にある「意志の力」によって、発語器官を通じて発せられる天理にかなったことばは、実現力を持ち、天理の支配下にある神々もこれに従う。讃歌は儀礼祭式用の「武器」であった。

作詩は他に優るものでなければならぬ。日、月、季節、歳の巡りに関わる祭りでは複数の部族が同時に呼び競い、戦さでは、両陣営が同じ神を呼び争うことが避け難い。伝統に則ると同時に、神々を喜ばせるに足る、その都度「見られた」新しい歌が求められた。

3 生活の背景

部族は王と祭官とに導かれていた。王は元来選ばれられるが、血筋が尊ばれ世襲化して行く。祭官たちも特別

な家系に属していた。両指導者層は、もともと、必ずしも固定されていなかったと思われる。アーリヤ諸部族は、牛、馬、山羊、羊の群れを伴い、部族の火を携えて移動する父権的遊牧民であった。毎年、一定期間定住して大麦を栽培したらしい。小麦、綿、米はリグヴェーダには知られていない。移動期をヨーガ、定住期をクシエーマとよぶ。

文明の利器は最小限のものであった。御者と戦士各一名が乗り、偶数の馬に牽かれる競走・戦争用の二輪軽戦車は特に重んじられたが、戦車職人はアーリヤに属さない。騎馬は文献の表面には殆ど現れない。織物は女たちの領域に属する。精神の諸活動は好んで戦車と織物の部材や技術に喩えられ、両者が技術の粹であったことを物語る。土器の技術はあったが、実生活には異部族の作った優れた製品が用いられたらしい。印欧語族由来の職人名としては「肉切り職人」に由来する神名トゥヴァシュトリ、「大工」タクシャン、各種の技術者を意味するシャミトリ「努め励む人」などが目立つ程度である。技術を司るリブ三神は元来神ではなかったとされ、協力関係にあった異部族の優れた技術者に由来するかと思われる。彼らはソーマにも通じていた。「リブ」はギリシャのオルペウスと同起源であろう。

リグヴェーダには、部族間や異部族との闘争が色濃く投影されている。子孫と家畜の増大が生命線であった。焼き畑によって領土を広げ、河川流域を支配下に収めて東へ、一部は南へ進んだ。若い男児を遠征させ、また、他の土地へ放つて植民を進めた。「牛探し」と称する略奪行は、乾期の河川を利用する一種の経済活動であったと思われる。

4 デーヴァたちとアスラたち

神々の背景にはおおよそ二群が想定される。「デーヴァ」は天（輝く天空の覆い）を意味するディヤウ（ギリシャ語のゼウスと同起源）から作られた形容詞「天に属する」に由来し、ラテン語のデウスに等しい。印欧語共通時代に「天に住む（種族）」と考えられていた昔からの「神々」の系統を引き、自然界の諸現象（太陽の諸相、暴風、雨、大地など）や英雄神、機能神を包摂する。火（アグニ）やソーマもこれに属する。宗教の根本は祭火と太陽光との同置に基づく「拜火教」にある。水は女性複数形で表され、永遠に循環する、生命を持つ女たちであった。

インドラは最も好まれ、多くの英雄的行為が彼に帰せられる。リグヴェーダの約四分の一がインドラ讃歌である。

インドラは、誤って雷霆神と紹介されることがあるが、身を守るために雷を発するのは、撲殺されるヴリトラ（「障碍」、同時に水源を占有するコブラ）の方である。インドラの武器はヴァジュラで、原始的なものから、インド・イランに共通する金属製の諸様式に至るまで、多様な種類の「棍棒」である。富裕な異部族パニの牛たち（太陽光と重ねられている）を「解放」したのもインドラである。

アーディテヤ「アーディテイの息子たち」と総称される神々もデーヴァであるが、彼らの存在が「アスラたち」の基に想定される。母アーディティは「無拘束、自由」を意味する。アスラ、イラン語のアフラは「主、首長」を意味し、元は、王権の神格化であるヴァルウナの呼称であったと思われる。インド・イラン共通時代に遡る社会制度の神格化で、ヴァルウナ（王権）、ミトラ（契約）、アリヤマン（部族慣習法）、バガ（家族間の財産・獲得物の分配）、アンシャ（個人の取り分）などが属する。社会制度が神々の姿をとっているのは、祭司階級がことば（文書）を独占管理していたことから説明できよう。彼らが、法律、天文、医学など、当時の「世界理解の学」の全知全能を動員して讃歌を作り、祭式を構築し、理論化した跡が窺える。

インドでは昔からのデーヴァたちが好まれ、新しい制度神は畏れられた。アスラたちは散文文献の段階になると、異部族を守護する「神ならざる神、悪魔、魔神」の類を意味し、仏教文献の阿修羅へと連なる。無論、ヴァルウナをはじめ個々の神々はデーヴァとして崇められ続ける。イラン側では逆にデーヴァ（ダエーワ）が退けられ、アフラはゾロアスターの唯一神アフラ・マズダー「知恵なる主」の中に受け継がれた。

5 伝承と刊本など

リグヴェーダは祭司たちの存在を支える道具として口頭で伝承され、写本は紀元後十数世紀以前には遡らない。マクス・ミュラーは一八四九年から七四年の間に、写本を基に、サーヤナ注（一四世紀）を付して出版した。この出版の実際を担ったアウフレヒトのローマ字による第二版（一九七）が標準的刊本である。インドの諸刊本をも含めて、いずれも単一の伝承に遡り、研究上相違を来さない。

口頭伝承は様々な工夫によって厳密に伝えられ、アクセント一つに到るまで編集時の姿を伝えていると言える。研究者はこれを基に、韻律、歴史文法などの力を借りて編集

